

ペン俳句会 句会報(三五十二号)

令和六年一月四日(木)

兼題『風花』、席題『羽』

句会を、昨年十二月と同じ場所で開催。出席は九名(投句十名。大津さん、森田さんは投句せず)

中村 晃也

雪催ひ沼に不動の鷺一羽  
鴛鴦が一羽混じれる鴨の陣

風花のひねもす舞へる湖畔かな  
掌の風花消ゆるまで眺む

風花やワイパー速めるまでもなく

松田 一文字

払暁や切り裂く叫び冬の鴟

羽子板の人気の押絵二刀流

巫女の注ぐお神酒受けたる初詣

風花や托鉢に発つ僧の列

注連縄の紙垂の白さや大社

浜口 金魚姫

風花よ舞へ千羽鶴萌え残り

風花が風花を追ひ母の墓

風花ふわり命の限り舞ひきつて

凍て星や母へ飛び立て千羽鶴

風花舞ふ母の声連れけはい連れ

宮原 凧

ふはりふは風花の果て見届けり

表紙絵に鶴の羽ばたく初

添え書きの幾久しくと賀状来る

存分に生きて巻き取る古曆

葱刻む我には我のひと日あり

志村 良知

金に染む風邪に家伝のサフラン茶

銃声や鴨や川面を低く這ひ

煤掃きに白羽根帚所在無げ

一人ひとり親送り終へ去年今年

風花の煌めける空西の風

安藤 晃二

鎌倉の海の青さよ実万両  
寒禽の声のする家朝日射す

小春日に鶯羽ばたくや由比力浜  
昨夜の宴覚めやらぬまま昼の酒

風花や臉に頬にくちびるに

内藤 まりこ

手を抜きし今年も来たりお正月

山茶花の生垣めぐる鬼ごっこ

初夢は羽まくらにて夢つむぐ

風花を手に受け青き天あほぐ

早や一年門を洗ひて松飾り

西川 知世

初刷りの羽搏く鶴を開きけり

東京に島嶼ありとふ冬鷗

川底の石荒々と山眠る

定席の空きしままなる初句会

風花や別れ告げるに潔き

新田 ゆふき

鴉二羽霜に戯れ朝日燦

白波の沖の小島や富士嵐

朝一番トランポリンに寒鴉

風花やマフラーに埋むる赤き頬

寒風に富士裾野ごと揺れおりぬ

長尾 進一郎

夜回りの拍子木の音遠ざか

薄雲や羽根つきの音のんびりと

風花を掴まんと子ら駆け回る

「悠遊」の原稿出して晦日蕎麦

句づくりにも悩む幸せ年初め

次回は令和六年二月一日(木)、

兼題は季語「立春」(松田一文字さん出題)、

席題は西川知世さん出題の「焼」です